



卓球を指導するヨルダンパラリンピック委員会のモハンマドさん(右)。「女性参加者の多くは先天的な障害がありますが、毎週2時間の練習で腕が上がるようになりました。お母さんたちも含め、ここにいるみんなが一つのチームなんです」

女性の活動日、コート脇は付き添いの母親らの情報交換や息抜き場となっている。「ピ

ていたJICAヨルダン事務所の日本人職員はこう語る。彼女はシリアで2年間、青年海外協力隊として活動した経験を持ち、流暢なアラビア語を話す。

一方、以前はシリアでJICAの事業に携わっていたシリア人のニザールさんは、今は避難先のヨルダンでシリア難民支援に尽力する一人。支援の受け手となる障害者やその家族の所在を把握するため、JICAヨルダン事務所現地職員らと奔走した。「シリア難民障害者の多くは社会とのつながりを失い、受け入れ先の施設などに閉じこもっていました。コミュニティ参加の機会を提供したいと思い、JICAの障害平等研修への参加を呼び掛けましたが、当初は断る人が多く、参加しても、けがを治すための薬はないか」という質問ばかりだったんです」

シリア難民障害者を「障害平等研修ファシリテーター」「ピア・カ

ウンセララー」として育成するという二本柱でスタートした支援は、その後、オバダさんやバシヤールさんなど、意欲的な参加者11人が自分たちの抱える問題や解決法を考える活動へと発展。彼らを最も近くで見守り、アラビア語での会話を通じて意見をすくい上げてきた日本人職員は、当時をこう振り返る。「こんな活動ができたら、というJICAとしての青写真はありました。彼ら自身に活動を広げてもらいたかったので、私たちはサポートに徹することにしたんです」

**助け合いの精神で
広げる活動**

こうして、難民障害者たち自身から提出された企画書には、スポーツ活動と、障害者の生活支援に関する情報収集活動という二つの計画が記されていた。スポーツ活動はヨルダン・パラリンピック委員会

ア・カウンセララーから卓球の話を聞いて参加してみたいです。出掛けたがらなかった娘が楽しそうに卓球をし、前向きになっていく姿を見て、私も障害をマイナスだと思わなくなりました。私たちはみな、ここで友達になったんです」

そんな母親たちと交じって、シリアの郷土料理について談笑する日本人職員の姿を遠目に、ニザールさんは、「これだから彼女はみんなから好かれるんだ」とほほ笑む。

他方、情報収集の活動では、障害者の生活支援に関する17の団体の情報を難民障害者たち自身が収集し、2016年5月にサービスマンが完成。彼らは難民支援団体などを募ってワークショップを開催し、ガイドブックを紹介したり、活動に障害者支援の視点を組み込むことの必要性を提言したりした。

同年8月には、日本から専門家を招いてピア・カウンセララー養成

のアドバンスコースも開講された。「私自身も四肢麻痺の障害があるため、異国での活動は不安でしたが、でも、シリアの難民障害者たちの役に立てればと思いい、参加を決断しました。助言せずに黙って聴く」というピア・カウンセララーの原則を理解してもらったのに苦労しましたが、演習を通じて彼らは十分な知識を付けてくれました。講師を務めた専門家はそう話し、シリア難民障害者によってピア・カウンセララーがヨルダンに定着することを願っている。

想像してみてもほしい。一面に広がる菜の花の黄色、杏の香り、のんびりと語らう人々の声——JICAヨルダン事務所の日本人職員が語ってくれたシリアの姿だ。「難民」「障害者」という言葉の先の一人一人と向き合うJICAの支援。流れ着いた先で互いに手を取り合いながら、彼らは今、前を向いて生きている。

ピア・カウンセラー兼、障害平等研修ファシリテーターのワエドさん。ワエドさんとヨルダン人の障害平等研修ファシリテーターとの親交がきっかけとなり、女性の卓球活動日にはヨルダンの障害者2人も参加するように



シリア難民キャンプでの電力分野技術者育成支援

ザアタリ難民キャンプでは、電力分野の知識や経験が乏しい難民が独自にシェルターへの配線の引き込み作業などを行っていたため、感電事故や設備の故障が頻発していた。そこで、JICAはヨルダンの電力公社や国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)と連携し、昨年8月にキャンプ内の難民200人を対象とする技術者育成支援を開始。電力公社の研修所で3週間の訓練を受けた研修員たちは、今後、技術者として報酬を得ながら配線作業を手掛け、キャンプに住む8万人の日常生活に貢献することが期待される。キャンプでの経験は、シリアの復興後、母国でも生かされることだろう。



ザアタリ難民キャンプでの配線作業の様子

ヨルダン
From Jordan

ここに生きる

「難民」「障害者」という立場でヨルダンに暮らすシリアの人々がいる。彼らは自らと向き合い、その目を再び外へ向けて、人のため、社会のために力強く歩み始めた。人に寄り添うJICAの支援が、その強さと優しさの連鎖を支えている。



**突然、
難民障害者になった**

——ヨルダンに来る前は母国で何をしていましたか？

「シリア南部のダルアで高校に通ってました。スポーツが好きで、サッカーのトレーナーに憧れていました」

——どうして障害を負ったのか聞いてもいいでしょうか。

「検問所の近くで背中を撃たれたんです。でも、今も昔も僕が僕であることに変わりはありません。今は障害者の権利を守るために団体を立ち上げたいと思っています」

下半身の自由を奪われた青年が自身の過去と未来を語る声は、穏やかで、凜としている。

オバダさん(21歳)が戦火を逃れて家族と共にヨルダンにやってきたのは2012年。被弾後、ヨルダンで手術を受け、今は車椅子で生活している。JICAを知ったのは手術から2年後のこと。「日本の専門家による、障害平等研修がある」と聞いたんです。障害がどういうことなのか分からなくて、参加してみようと思いました」

障害平等研修とは、障害者が議論の進行役としてファシリテーターを務め、多様な参加者に対して社会の側にある「障害」を見抜き、それを取り除く力を養ってもらうワークショップ型の研修のことだ。

このワークショップへの参加がきっかけとなり、オバダさんはJICAによる障害平等研修のファ

シリテーター養成コースを受講。それだけでなく、障害者の精神的サポートや自立生活の手助けを行う「ピア・カウンセララー」の養成コースも修了した。現在はNGOの職員として、ヨルダンの首都アンマンで、シリアから避難してきた難民障害者を主な対象にカウンセリングを手掛ける日々だ。

同じくシリアで被弾し、足が不自由になったバシヤールさんもピア・カウンセララーとして活動している。「JICAの研修に参加するオバダを見ていて気付いたんです。

障害があっても出掛けられるし、人の役に立てるんだって」

**障害を受け入れることが
始めの一步**

JICAのシリア難民障害者支援の始まりは2014年秋。当時、JICAはヨルダンに流入しているシリア難民やその受け入れ社会への支援を実施していました。一般的に障害者支援は後手に回りがちなため、私たちは新たに難民障害者を対象にした支援を始めたのです。当初からこの支援に携わっ

ピア・カウンセリングを終えたオバダさん(右)。カウンセリングの受け手はシリア難民障害者だけでなく、アンマンの病院の入院患者にも広がっています。「自立生活とは、自力で全てやることではなく、自分の意志で決定するという意味なんです」と力強く語る